北大散歩

ポプラ並木の物語

写真・文　片山通夫

北海道大学は北海道開拓の礎となった札幌農学校の後身であるという話は、すでに多くの文献やガイドブックにも掲載されているからご存知の方も多いだろう。

札幌農学校は「少年よ大志を抱け」の言葉で有名なクラーク博士が在職した学校である。ちなみにラーメンとともに日本人の好物の一つ、カレーライスもこの農学校の学生寮でも食された。**1876** 年（明治 **9** 年）、当時、札幌農学校の教頭として来日していたウィリアム・スミス・クラークが、「生徒は米飯を食すべからず、但しらいすかれいはこの限りにあらず」という寮規則を定めた。理由は開拓途上の北海道で産する農作物の一つ、ジャガイモをカレーに入れて、消費することを奨励するためだとか…。

初っ端からカレーに寄り道である。

ポプラの木

北海道大学博物館所蔵

北大の前身である札幌農学校の第 2 代校長・森源三の息子、森廣が 1903 年（明治 36 年）にアメリカから持ち帰った数本の並木である。これを南鷹次郎教授が農道のアカシア並木に続くように植えて育てた[4]。1911 年（明治 44 年）、新渡戸稲造に同行してアメリカにわたった南は、農場の風除けにするために多くのポプラを購入して持ち帰った。翌 1912 年（明治 45 年）、これを上田半二郎助手や林学科の学生たちが森のポプラに加えて植え、並木ができあがった。

1954 年（昭和 29 年）、洞爺丸台風によって数本のポプラが倒れた。1959 年（昭和 34 年）の台風による被害はそれ以上に甚大で、10 本以上が倒木となり、大学内では伐採論が唱えられるようになった。だが、小学 3 年生女子からの「切らないで」という手紙を受け取った町村金五北海道知事の働きかけにより、新たな苗木が植えられ、以前にも増して立派なポプラ並木となった。しかしその後、倒木の危険があるという理由で立ち入りが禁止されるようになった。

2004 年（平成 16 年）9 月 8 日、札幌を襲った台風 18 号によって北大キャンパスの木々は壊滅的な状態に陥った。約 50 本のポプラ並木のうち、残ったのは立て直した 2 本を含めて 32 本だった。旭川市の製材所に運び込まれたポプラ倒木のうち、良質の板が取れた 1 本を使ってチェンバロが作られた。並木が抜けた箇所には若木が植えられ、また路上にウッドチップを敷く整備がなされることで、一部の立ち入り規制が解かれ散策が可能になった。

ウイキペディアから転載

北大散歩　ポプラ並木の物語

チェンバロの知識

　一見ピアノと似ているので全くの音楽音痴である筆者などその違いは判らない。チェンバロは、バロック時代にはポプラの木で作られていたといわれている。そしてチェンバロは ヨーロッパのチター属弦鳴楽器で、ピアノの源流ともいえる鍵盤楽器の一つ。外観はピアノによく似ているが、原理が異なっている。ピアノはハンマーで弦をたたいて音を出すのに対し、チェンバロは爪状のプレクトラムで弦を掻(か)いて音を出す。
　つまり、鍵を下げるとジャックとよばれる木柱が押し上げられ、それに取り付けられたタング（舌）にはめ込まれたプレクトラムが弦を掻く。鍵を戻す際には、タングが弦とは反対方向に倒れ、プレクトラムが弦に触れない仕組みになっており、同時に、ジャックの上端につけられたダンパーが音を止めるという原理。

　ポプラ　この古の大志、札幌の地に育まれ **2004** 年
嵐によって倒れ **2006**　年
ここに蘇る

　これは、倒れたポプラの木で造られたチェンバロに刻まれているラテン語文字の翻訳文である。

北大散歩　ポプラ並木の物語

北大散歩　ポプラ並木の物語